

## 先天性心疾患：21世紀の周産期医療

### 前置き

里見 元義

長野県立こども病院循環器科

第41回日本小児循環器学会総会・学術集会において、長嶋正實会長にはシンポジウム『先天性心疾患：21世紀の周産期医療』を企画していただいた。先天性心疾患の治療の時期が学童期から乳幼児期、乳幼児期から新生児期へと、より早期へと移行する傾向がみられるこの時期にあつて、21世紀の医療を展望するにふさわしいすばらしいテーマを掲げていただいたと思う。また編集委員会には、このシンポジウムを本誌にまとめて掲載する決定をしていただいたことに感謝したい。

まず大阪府立母子保健総合医療センターの稲村 昇先生には「周産期医療における胎児心エコー検査の役割」について発表していただいた。多数例の出生前診断の実績に基づいた胎児心エコー所見と、周産期の経過との関連から、読者は同様の所見を胎児心エコー検査で認めた場合の臨床経過を予測する参考にできるであろうと思われる。

久留米大学の前野泰樹先生には、胎児心エコー検査を普及させるために胎児心エコー外来を開設したお話をしていただいた。その効果は、単に検査件数の増加のみではなく、周辺の産科医に対する意識の向上や、若手小児循環器医師や超音波検査技師(ソノグラファー)の教育にも効果があったことが報告された。

長野県立こども病院の松井彦郎先生には、胎児心エコー検査による出生前診断に基づいたカテーテル治療に関する発表をしていただいた。正確な診断技術と、周産期に起こる可能性の予測、多数の部門がチームを組んで同じ方向性で動くことの重要性を話していただいた。

胎児心エコー検査の普及に関しては日本胎児心臓病研究会が中心となって先ごろガイドラインが作成され、本誌に掲載されたところであるが(日小循誌 2006; 22: 591-613)、胎児心エコー検査の普及は、松井論文でも示されたとおり、前方視的医療(prospective medicine)を行うことによって明らかに生命予後の改善に貢献することに加えて、良質なむだのない医療を行うことにより医療経済学的にも貢献するものである(里見元義, 松井彦郎, 安河内聡, ほか: 左心低形成症候群における出生前診断例と非診断例の医療費の検討. 日小循誌 2006; 22: 551-554)。前野論文では英国の普及状況が示されているが、わが国では日本胎児心臓病研究会が中心になって、ホームページ上での胎児心エコー検査のオンライン登録を行って普及に努めている。一方では、小児科医の不足が指摘されるなかで、通常の心エコー検査にも増して高度な技術と知識が必要とされ、先天性心疾患が診断された場合の両親への長時間にわたる説明が必要になることなどを考えると、普及すれば小児科医の厳しい労働条件をさらに悪化させる悪循環になることも懸念される。これらを同時に解決するためには、小児科領域に加えて、胎児心エコー検査の領域にもソノグラファーの積極的な導入を考慮する時期にきているものと思われる。21世紀の周産期医療体制として、熟練した信頼のおけるソノグラファーを導入して、彼らが決められた断面を描出し、医師はそれに基づいて診断を確認し、さらに詳細な診断を行うという、欧米なみのシステムが望まれる。これが実現すれば小児科医の負担を大きくすることなく胎児心エコー検査の精度を保ったまま普及させることが可能であろう。発表のなかでも触れられているが、欧米においてはcritical AS に対して胎内治療を行うことによって左心低形成症候群への移行を予防できたという報告もなされている。動脈管依存性疾患においては出生前診断がなされていれば、ショックを予防することが可能である。21世紀には、カテーテルインターベンションの進歩に関連して、胎内での積極的治療にある程度踏み込んでいくことも予想される。21世紀の周産期医療は遺伝子解析に基づいた疾病予防学が進歩することが推測されるが、一方、より身近なところでは出生前に疾患を発見することに基づいて発症予防したうえで、良好な全身状態でカテーテルインターベンションや外科治療に移行する医療がすでに現実のものになりつつある。

別刷請求先: 〒399-8288 長野県安曇野市豊科3100

長野県立こども病院循環器科 里見 元義